
優しい恋をかなえましょう

sakura

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

優しい恋をかなえましょう

【Nコード】

N1153Z

【作者名】

sakura

【あらすじ】

新米刑事の高崎沙織は捜査中の事故で記憶喪失になってしまった。彼女の相棒であるベラン刑事橋本和宏はそんな彼女の記憶が戻ってくれることを願いながら、やがて彼女に心をひかれていく。なお、個人の萌えだけでつぶしっているので、展開はかなり早めとなっております。

尚、ムーンライトノベルで書いているお話のR15版になっております。

1 目覚め

瞳を上げた。

彼女が。

「……おい」

声が聞こえて、彼の相棒とも呼べる女性は視線を横に移した。

低い声。

男の声だ。

高崎沙織は彼の眼差しを受けてから、ゆらりと視線を彷徨わせる。肘について上半身を起こした彼女は病衣をまとった胸元をそれほど大きくはない手でそつと押さえた。

「あなた、誰……、ですか？」

問いかける声が不安げに揺らぐ。なにに不安を感じているのか、とか、そんなことを男には聞けなかった。

「高崎、記憶が……？」

「記憶？」

なにを言ったらいいのかわからないらしい彼女は困惑したように彼を見つめた。

「いや、いいんだ」

男も困ったように彼女を見下ろすと、ため息をついて持っていた花束を看護師に手渡した。

「軽い脳震盪ですよ、心配いりません」

そう言いながら看護師は花束を受け取って病室を出て行く。

そうして、二人きりになった病室に沈黙が流れた。

「あの……、わたし、脳震盪なんですか？」

問いかけた高崎沙織に彼は苦笑した。

「あー……、まあ」

「教えてください、なにがあっただんですか」

そのことに対する不安感が、彼女にそんな瞳をさせているのだと思

うと胸が痛んだ。

彼女は、こんなところで立ち止まっでいていい女性ではない。

「君は、自分が警察官であることは覚えているか？」

問いかけると、彼女は首を傾げる。

「わたし、警察官なんですか？」

そう尋ね返しながら、彼女は不安げな面持ちのままできよろきよ
ろと病室の中を見回した。

聞いている事に質問で返されて、男は今までにないことに当惑し
た。

自分も警察官である以上は、今まで何度となく危険な事故や事件
は目の当たりにしてきた。しかし、目の前の彼女のように、脳震盪
で彼女のような反応を見せる者を見るのは初めての経験だった。

「君の名前と、年齢を言ってみろ」

「名前と、歳ですか……」

まるで「なにを言っているんだろう」とでも言いたげな彼女の瞳。
しかしそれでも、彼女は困惑しながらも男に告げた。

「高崎沙織、十五歳」

「……」

彼女の言葉に絶句した。

「ここ、ニューヨークじゃないですね？ どこですか？ どうし
てわたし、こんなところにいるんですか？」

彼女が矢継ぎ早に問いかける。

「それに、おじさまは？ どうしてわたしの名前知ってるんですか
？」

思わず詰め寄るような勢いで、男の胸元に手を伸ばした彼女は不
意に後頭部に痛みを感じたのか体をすくませた。

「……いつ！」

悲鳴が上がる。

後頭部を押さえた手が震えていた。

「おい、大丈夫か？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1153z/>

優しい恋をかなえましょう

2011年12月4日08時46分発行